

目次

● 夜	三木卓	5
● わたしが一番きれいだったとき	茨木のり子	47
● 春さきのひよう	杉みき子	51
● そして、トンキーもしんだ	たなべまもる	81
● 大もりいっちよう	長崎源之助	99
● ブツとなる闇へひり大臣	古田足日	109
● 烏の北斗七星	宮沢賢治	127
● 赤牛	古井由吉	143

のすき間ができました。

そこで大監督が息を切らして号令を掛けます。

「演習はじめいおいっ、出発」

艦隊長鳥の大尉が、まっさきにぱつと雪を叩きつけて飛びあがりました。鳥の大尉の部下が十八隻、順々に飛びあがって大尉に続いてきちんと間隔をとって進みました。

それから戦闘艦隊が三十二隻、次々に出発し、その次は大監督の大艦長が厳かに舞いあがりしました。

そのときはもうまっ先の鳥の大尉は、四へんほど空で螺旋を巻いてしまつて雲の鼻つ端まで行つて、そこからこんどはまっ直ぐに向こうの杜に進むところでした。

二十九隻の巡洋艦、二十五隻の砲艦が、だんだんだんだん飛びあがりしました。おしまいの二隻は、いっしょに出発しました。ここら

うも鳥の軍隊の不規則なところ

鳥の大尉は、杜のすぐ近くまで行つて、左に曲がりました。

そのとき鳥の大監督が、「大砲撃てっ」と号令しました。

艦隊は一斉に、ががあがあがあ、大砲をうちました。

大砲をうつとき、片脚をふんとうしろへ挙げる艦は、この前のニダナトラの戦役での負傷兵で、音がまだ脚の神経にひびくのです。

さて、空を大きく四へん廻ったとき、大監督が、

「分れっ、解散」と云いながら、列をはなれて杉の木の大監督官舎におりました。みんな列をほごしてじぶんの営舎に帰りました。

鳥の大尉は、けれども、すぐに自分の営舎に帰らないで、ひとり、西のほうのさいかちの木に行きました。

雲はうす黒く、ただ西の山のうえだけ濁った水色の天の淵がのぞいて底光りしています。そこで鳥仲間でマシリイと呼ぶ銀の一つ星がひらめ

ほごして「ほぐす」の方言。ほぐし マシリイ 水星を指し、その英語「Mercury」から付いた呼び名だと考えられている。

営舎 兵隊が暮らす兵営の建物。

さいかちの木 マメ科の樹木。幹・枝に多数のとげがあり、葉は複葉。夏に緑黄色で四弁の細かい花が開く。

巡洋艦 遠くまで速く進むことがで
きる軍艦の一種。

砲艦 沿岸の警備をおもに行う大砲を備えた小型の軍艦。

「おれはあした戦死するのだ。」大尉は眩やきながら、許嫁のいる杜の方にあたまを曲げました。

その昆布のような黒いなめらかな梢の中では、あの若い声のいい砲艦が、次から次といろいろな夢を見ているのでした。

鳥の大尉とただ二人、ばたばた羽をならし、たびたび顔を見合わせながら、青黒い夜の空を、どこまでもどこまでものぼって行きました。もうマジエル様と呼ぶ鳥の北斗七星が、大きく近くなって、その一つの星のなかに生えている青じろい苹果の木さえ、ありありと見えるころ、どうしたわけか二人とも、急にはねが石のようにこわばって、まっさかさまに落ちかかりました。マジエル様と叫びながら、驚いて眼をさましますと、ほんとうにからだの枝から落ちかかっています。急いではねをひろげ姿勢を直し、大尉の居る方を見ましたが、またいつかうとしますと、こんどは山鳥が鼻眼鏡などをかけてふたりの前にやって来て、大尉

マジエル おおぐま座の学名「ウルサ
マジョール」の「大きいこと」を
意味する「マジョール」からの造語
であると考えられている。

に握手しようとします。大尉が、いかんいかん、と云って手をふりますと、山鳥はピカピカする拳銃を出していきなりずんと大尉を射殺し、大尉はなめらかな黒い胸を張って倒れかかります、マジエル様と叫びながらまた驚いて眼をさましますというあんばいでした。

鳥の大尉はこちらで、その姿勢を直すはねの音から、そらのマジエルを祈る声まですっかり聴いて居りました。

じぶんもまたためいきをついて、そのうつくしい七つのマジエルの星を仰ぎながら、ああ、あしたの戦でわたくしが勝つことがいいのか、山鳥がかつがいいのかそれはわたくしにわかりません、ただあなたのお考えのとおりです、わたくしはわたくしにきまったように力いっぱいたたかいます、みんなみんなあなたのお考えのとおりですとしげに祈って居りました。そして東のそらには早くも少しの銀の光が湧いたので